
全ては国のために

鷹売りのタ力さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全ては国のために

【著者名】

ZZコード

【作者名】
鷹売りのタカさん

【あらすじ】

これは、紀元前からこの国を守り続けてきた一族と、たまたまその一族の、代々使用人長兼親衛隊隊長をつとめてきた一族に転生した高校生の物語である。

プロローグ～日本～（前書き）

はじめまして、鷹売りのタカラさんです。
この物語では主人公が無双する予定です。
そういうものが好きな方も好きでない方も
暇つぶし程度に見ていいただけならうれしいです。

プロローグ／日本

ここは日本のとある武家屋敷。そこで、新たなる命が産声を上げていた。

「当主！お産まれました！」

屋敷の一室に、男の低く大きな声が響く。その視線の先には、細身で薄く髭を生やした男が腰に一振りの刀を携え、悠然と佇んでいた。

「おお、ついに産まれたか・・・。案内します」

男は、当主と呼ばれた男を連れ、その部屋を後にした。

長い廊下の奥にある部屋から赤子の泣き声が聞こえる。男は、当主と呼ばれた男と共にその部屋の中に入つていった。

部屋の中には長く綺麗な黒髪が目立つ、大和撫子よ呼ぶに相応そうな女性と、その周りを忙しそうに駆け回る使用人の姿があつた。女性の顔からは出産による疲労が感じられた。そして、その女性の胸に赤子が一人抱かれていた。

「奥方様。当主をお連れいたしました」

「(ノ)苦勞様」

奥方様と呼ばれた女性は、男に労いの言葉をかけると先ほどの当主と呼ばれた男の方を向いて言った。

「御國（みくに）さん、赤ちゃんです。私とあなたの子供ですよ。」

「ああ、よくやつた椿姫（つばき）、でかしたぞ。さてそれでは早速・・・」

やう言つと、御國は腰に携えた刀を抜き、未だに泣き止まぬ赤子に刀の柄を握らせた。すると今まで泣き止まなかつた赤子が段々とおとなしくなつていき、1分後には笑顔になつていた。

「ふふ、流石は御國さんの子供ですね」

「うむ、私も産まれたときは全然泣き止まなくて使用人一同困つて
いたが、父上が今と同じようにこの『日ノ本』を握らせると、瞬く
間に泣き止んだそうだ。父上の話によれば私だけでなく、我が『日
本（ひのもと）』の家系の者は皆、この方法で泣き止んだらしい。
この子も立派な守護者の血を引いているということだろう」

「ええ、この子もあなたのように、最強の名に恥じぬ強さを秘めて
いると思います」

「うむ」

そう言つと御國は立ち上がり、先程から後ろで待機していた男の
方を向いて言つた。

「暁文（あきふみ）、宴の準備をしろ。我が子の誕生だ。盛大に祝
うべ」

「その前に当主、大事なことを忘れています」

「む？何かあつたか？」

「ふふ、名前ですよ。御國さん」

椿姫の一言で、御國は「あつー」と大きな声を上げて、天を仰ぎ叫んだ。

「不覚ー」の『日本御國』、人生で最大の失態だ！」

「反省は後にしてください。それより早くこの子に名前を」

「おつと、そうだった。男の子だからなあ、強そうな名前にしてやりたいな」

御國は頭を抱えながら呻いた。そのまましばらくすると、突然笑顔になり言つた。

「決めたー」の子の名前は『帝（みかど）』だ！

『日本帝』だ！」

今宵、建国以来、歴史の裏でずっとこの国を守り続けてきた最強の家系に、新たなる名前が刻まれた。

プロローグ～平行世界～（前書き）

一話目です。

なるべく早く更新していくつもり思っています。

プロローグ～平行世界～

日本家で、新たな命の誕生が祝われているころ、別の平行世界では一つの命が終わりを迎えるようとしていた。

*

多くの人が歩いている広い歩道の中に、やたら足取りの軽い青年がいた。お世辞にも顔はいいとは言えず、中肉中背で眼鏡をかけたその青年が顔をだらしなくにやつかせている。そしてその手には、紺色のビニール袋が握られていた。

「ふふふ、ふははははは、ついに手に入れたぞ！なのはのゲームを！このときをどれほど待ったか・・・。俺がなのはに出会ってからこれまでの道程は険しいものだった、がしかしすべてはこの時のためにあつたとも言えよう。どれ、もう一度あの神々しいオーラを放つパッケージを拝見しようか」

そう言つ青年からは酷く禍々しい狂気に似た気配が放たれていて、周囲の人々はドン引きだった。

青年は紺色のビニール袋からゲームのパッケージを取り出した。

そのパッケージには『魔法少女リリカルなのは A・S』と描かれていて、数人の男女がコスプレのような服を着て、各自ポーズを決めていた。

一般的に見ればオタクと呼ばれるような方々が所持しているであろう物を、多くの人々が闊歩する天下の往来で、顔をにやつかせながらまじまじと見つめていれば、その後どうなるかは予想がつくだろう。

10秒もしないうちに、その青年の半径1メートル圏内に近づくものはいなくなつた。

「ふん、所詮は否定するしか脳のない衆愚か。受け入れることこそが世界平和に繋がる大いなる一步だとなぜ気づかない。他人のやがたに口出しそる気はないが、個人の趣味を否定するのは無礼であり、一種の精神攻撃だ。嘆かわしい・・・まあ、アニメやラノベに好き嫌い言つてる俺が言つたところで、説得力など微塵もないがな、ふひひ」

そんなことをブツブツと呟いていたついでに、小さな横断歩道に着いた。

「さあ、家までの距離はもう目と鼻の先。戦う準備はできている。隣の公園で子供が無邪気に戯れているな。頼むから飛び出しなんて

まねはするなよ。一次創作なんかじゃここで子供が飛び出してそれを助けた俺才ワタ、なんて展開がありきたりなんだから。でも待てよ、それで俺が死んで一次創作よりしく神なる存在が出てきてなのは世界にでも転生できたとしたら、それはとても素晴らしいことなのではないか？最高に俺得な世界がそこにはあるんじゃないか？原作キャラとキャラうふふできたらと思つと桃色な妄想が我が脳を駆け巡るぞ！・・・まあ、実際にそんなことがあるはずがないがな。俺はこの後無事家に着き、なのはのゲームを誰にも邪魔されずにプレイする。子供たちは戯れ、夕刻に母親の呼ぶ声を合図に各自帰路に着く。信号待ちの車は交通ルールを守り、何のトラブルもなくそれぞれの目的地にたどり着く。それの何が不満だつて言うのさ。俺も無事、子供たちも無事、それでいいじゃない。俺のため、君たちのためにも、そこで無邪気に戯れていたまへ、チニシ子たちよ

そして信号が赤から青に変わる。青年は、よりいっそう顔をにじつかせ、待ち受けるであろう栄光へのスタートラインを切った。

ナビဂැල්ලайнは存在しないことを知らずに・・・。

青年が一步踏み出したと同時に道路に転がるボール。

それを取ろうと道路に飛び出した少年。

歩行者の信号が青に変わっているにも関わらず突っ込んできた大型車。

「ふざけるなよクソがあああああああああああッッッッッッッッッ！－－－！」

[11]

まさか自身の理想が一つも叶わずに水泡に帰す様は拍手すら送りたくなる。現実と反対の出来事を予知する能力が備わっているのではないかと思うほどだ。そんなことを考えると同時に青年は、子供を救うため、自身も道路に飛び出した。

勘違いしてはいけない、青年はちつぽけな正義感で飛び出したのではないということを。親を泣かせ、兄弟を泣かせ、その涙すらどこ吹く風と無視し続け、怠惰な日々を送ってきた青年。将来に希望があり、無邪気に公園で同年代の子達と腕白に駆け回る少年。

「どっちが社会的に得かを考えたら、無論後者だろうがああああ！」

! ! ! !

青年は我が身可愛さに将来有望な若い命が散るのを眺めているほど墮ちてはいない。損得勘定はわきまえた上で出した結論である。

青年は全速力で少年に近づき、全力で突き飛ばし、歩道へと戻した。青年の目の前には既に死が迫っていた。

（最後に何か一言言いたいなあ。せっかくの駄目生活にこんなかっこいい形で終止符が打たれるなんて俺の主義に反する。駄目人間に相応しい一言を残し、潔く今生の別れを告げようではないか）

「なのは最高！一
次元最高！一
ト万歳！No job ,
No
つぐはあ！」

言わせりよ。

*

ちっぽけな未練を残して、一つの命は終わりを迎えた。

前回の続きになります。

目が覚めるといつは真っ白な空間だった。横には白、後ろも白、下にも白、上にも白、前に白髪のおじいさん、とにかく自分の周囲の全てが白色だった。

「あの何か知らんけど、落ち着いてもらえんか?」

現世に残した恨みの全てを吐き出していくと、目の前には長い白髪と埃一つない真っ白なローブが目立つおじさんがいた。

「なんだいおじいさん。何時からそこそこいたんだい？まあ、とにかく今の俺に近寄っちゃいけないよ。今この恨みの捌け口を探してい る最中だからね。そんなところにいたら運悪くお釈迦様になっちゃ うかもしないよ？」

「まあ、既にお釈迦様みたいなもんです、と言えばそれまでなんじやがな・・・。それに最初からここにいたよ。てか君、一度ワシの方見たよね」

再度俺が恨みを吐き出していると、おじいさんとんでもない声で止められた。そのおかげで俺の鼓膜が崩壊しそうになつた。

「おうふ・・・耳が・・・ミミガ一・・・」

「落ち着いたか？」

「あ、ああ、落ち着くべきか永眠するといひだつたよ」

「既に永眠しておるわ。さて、落ち着いたところで本題に入らうか。まづこの場所についてじやが、説明が必要か？」

「否、あんたの言動とかから大体察しあつてゐる。俗に言つ死後の世界とかいひやつだら？」

「死後の世界とはちよつと違つが似たような物じや。とにかく、そこまで分かつてゐななら話が早い。お主、転生といつものを知つておるか？」

「無論、一次創作なんかじや王道的なものだからな」

「つむ、ではお主、転生する氣はないか？」

「こゝの会話の流れ的にその質問が来る」とは予想していた、がしかしその質問に答える前に聞きたいことがある。何故そんな話を俺に持ちかける？」

「どうしてじや？」

「一次創作なんかじや 転生の話を持ちかけるのは神、もしくそれに近しい何かだ。そして転生させようとする理由の一つとして有名なのが、神側のミスで主人公が死に、その罪滅ぼしに転生させるというものだ」

おじこさんは長い白髪を弄りながら首を傾げた。

「確かにワシは一般的に神と呼ばれる存在じや。しかし話がよく掴めんのじやが……」

「つまりだ……あんたが俺を間接的に殺したヤツかつて聞いてんだよおおおおお……！」

そう言いつと神は、バツが悪そうに俯いた。

「む……わのとおつじや。此度のお主をお主の死はこひり側のミスによるものじや。すまなかつた」

やつぱり神は、地面に頭を吊りつた勢いで土下座した。

「なつ・・・おいおい待てよ。そこまでする事はないぜ。俺は真実が知りたかっただけだ、あんたに恨みはないよ。恨みがあるのはあくまであの車だ。それに神とは言え、見た目お年寄りにこんな土下座させてる俺つてすごい悪いヤツみたいじゃないか。頭を上げてくれよ。それとさつきの『転生の話』についてだが、返事はOKだ」

「む、何故じゃ？」

「転生なんて俺からすれば願つてもないことだ。死んで終わりだと思つてたが、人生も中々捨てた物じゃないな。ところで『転生』とは、そのまま俺が生きていた世界に生まれ変わることか？」

「それほどぢりでも構わんぞ。お望みとあらばお主の好きなゲームやアニメの世界に生まれ変わる事だって可能じゃ。何か希望があるのか？」

「無論、『魔法少女リリカルなのは』の世界を希望する。ちなみに神から何か能力をもらえるというのせ、実際のところあるのか？」

「然り、本来ならありえんのじゃが、君の場合はワシのミスが原因じゃ。罪滅ぼしと言つては何じやが、なんでも言つてくれ。大体のことは叶えてしょよつ」

「では、容姿の改善を要求する。具体的には、銀髪、黒と赤のオツ

ドアイ、身体能力チート、魔力チート、これだけあれば十分だ

「銀髪に黒と赤の目とは、バランスが悪くないかの？」

「いいんだよ、できるか？」

「当たり前じゃ」

そう言って神は俺に向けて手をかざした。すると、俺の中からとんでもない力が溢れてくるのを感じた。神が俺に鏡を渡してきたので、それを受け取り見てみた。鏡には銀髪で黒と赤のオッドアイを持ったイケメンが映っていた。

「なんと…? これが俺か…素晴らしい。ありがとう神よ」

「満足したかの? 生まれ変わるのじゃから、その姿にたどり着くのは随分先になるがの」

「問題ない。ちなみに原作キャラと同じ年になるように時期を合わせてくれ」

「よかね。では始めるぞ。達者でな」

その一言を聞いた瞬間、突如浮遊感が俺を襲った。

「へえ、本当にうつむいて送り出されるのか。貴重な体験をした」

その一言を最後に、俺は意識を失った。

*

「…………行つたか」

真っ白な空間の中、神は呟いた。

「中々面白い若造じやつたが、自身の憧れのキャラクターを前に、己が欲望を抑えていられるかの。まあ、送った先があの一族のいるところじや。数年後にはとんでもなく真面目なヤツになつてるかもしれんな。いやしかし、ちょうど子宝に恵まれなかつたと嘆いておつたからな、良いことをした気分じや」

真っ白な空間には、神の独り言が響いていた。

*

一刻も早く、この窮屈な場所から出たいと思い、目の前の光を求めて手を動かそうとした。しかし思うように動かず焦つていると、自然と押し出される感じがした。その瞬間、喉に違和感を感じ、あまりにも不快だつたため全力で叫んだ。

「う、産まれた！ 産されましたよ、当主。」

「ああ、よかつたな、暁文」

「ああ、子宝に恵まれず妻共々諦めていたが、神が私たちに恵みを
くれた」

「よせよ暁文。そんな柄じゃないだろ」

そんな声が聞こえて田を開けると、俺を抱いて優しそうに微笑んで
いる女性と、泣いて跪いている先ほど暁文と呼ばれていた男と、腰
に刀を携えた当主と呼ばれていた男と、その男の隣に6、7才ぐら
いの男の子がいた。当主と呼ばれていた男が、自身の隣にいる男の
子に言った。

「まじ帝、これから長い間一緒に過ごす事になるんだ。挨拶しな
い」

「はい、父上」

そして帝と呼ばれた男の子が、ゆっくりと俺の方に歩いてきて、俺
の顔を覗き込みながら言った。

「はじめまして、僕は帝、日本帝だよ。これからよろしく。

『流（ながれ）』

これが、俺こと『大和流』と『日本帝』のファーストコンタクトで
あつた。

プロローグ～平行世界～ 後編（後書き）

やつとヒロローグを終えました。
しばりくは原作キャラは出ません。
早いうちに出そつとは思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9683y/>

全ては国のために

2011年11月29日19時58分発行